三島市　（通巻第２号）

郷土館だより

Vol. I No.2
1978. 12. 1

（郷土館おかざり作り講座）

目　次

多呂地区の歴史・民俗調査(2)……1
郷土史の散歩道(2)……3
特別展「日本の暦」報告……5
県外歴史探訪「鎌倉」報告……6
おしらせ・その他……7

郷土館フィールドワークから

多呂地区の歴史・民俗調査(2)

館員（学芸員）　杉村　斉

住の民俗—屋敷神—

人類の生活様式の三要素に衣・食・住があげられる。今回の報告は、前回の「住居（間取り）」に関連して、住の民俗「屋敷神」について取りあげてみたい。

調査地区は、三島市多呂地区である。ここは、この数年来の宅地化が進み、今では純農村のおもかげはない。その多くの新住宅の中で、山を背景にした神明社を中心にして、江戸時代以来の旧家が何軒かある。屋敷神はこれらの旧家に行かなければ見られない。調査は、8軒の旧家を回って、屋敷と屋敷神を見せていただくことから始めた。

屋敷

屋敷神について述べる前に、屋敷ということに言及する必要がある

屋敷とは、家屋を構える一区画の土地のことを言う。屋敷（ヤシキ）という語が、文献で初めて出てくるのは承久（1219～）の頃である。さらに古くは、屋地・家地（ヤジ）と呼ばれていたらしい。多呂地区のような農村では、各戸屋敷を所有し、その中に住居と付属の建物、屋敷林、屋敷畑等を備えていた。屋敷は一家族がその土地に定着するための基本となる土地と言える。それだけに屋敷に対する愛着は深い。

多呂地区では、各戸の屋敷境ははっきりしているが、屋敷林は共有の形になっている。旧村落全体が箱根山西麓西端の山裾の小さい洞に抱かれるように在るからである。

屋敷神

屋敷神が、土地への定着の象徴としてまたは屋敷地の守護神として、各戸で祀られるようになったのは比較的後世のことのようである。古くは一門屋敷神と言って同族が一体となって祀る形式であったのが、分家等による村落分化によって、各戸屋敷神へと移行したと考えられる。

屋敷神は、一般的には、屋敷地内あるいはその近くに祀られている神を指す。静岡県民俗地図の屋敷神分布地図を見ると、実に多くの屋敷神が取りあげられている。その中で、分布の主流は中部西部地方の地の神様、東部・伊豆地方の稲荷様である。他には金神様、八幡様、天神様、観音（馬頭）様、不動様等々があるが、地域的な特色を発わす分布をしていない。

調査した多呂地区8軒の中、7軒が稲荷様を、1軒が毘沙門様を祀っていた。以下各戸屋敷神の調査記録である。

（調査項目）

A．住戸、戸主
B．屋敷神
C．祠堂
D．祭日
E．供物
F．その他
G．話者（生年月日）

A．三島市多呂239番地　大川欣一氏
B．稲荷
C．祠堂有り、銅葺屋根で錠つきの立派なものであった。最近建てたものらしい。新築した母屋の右正面西方向に在る。
※　D～Gについては留守だったため聞くことができなかった。

A．三島市多呂288番地　原準一氏
B．稲荷、金毘羅、不動明王
C　祠堂は母屋の裏鬼門にあたる（北東）裏山の中腹に有る。コンピラサンは同じ祠堂にフドウサンは祠堂前に石像で在る。鳥居も堂も新しく近年建て直したことが判る。
D．稲荷様の祭日は2月初午の日。
E．竹のツツッポにコワメシを盛って供えた。
F．昔は10軒くらいの仲間で、コワメシを交換して供えた。正一位稲荷大明神の幟は昔のもの（于時安政六年、己未二月初午、原五兵衛）で、布製のものを今も使っている。
G．原準一さん　明治34年5月15日生

A．三島市多呂240番地　杉山春雄氏
B．稲荷、地神尊（ジジンサン）
C．祠堂は母屋（イタク）前面の南東方向に有る
D．祭日は、昔は五節供と言って正月、2月初午4月3日神武祭、5月15日節供、7月15日神明社の祭、10月15日であったが、今は初午が中心である。
E．カケウオ（鰯などの鮮魚二匹に藁を通して祠堂に吊す）、モチ、ゴハン、ニシメ、地神尊にも同様のものを供えるがカケウオは無し。

F．祠堂の位置は昔は裏鬼門の方向であった。初午の日の幟は分家から本家（オオヤ）に持ってきた。地神尊については地所の神様であるとの言い伝えが残っているだけである。
G．杉山つねさん　大正4年3月18日生

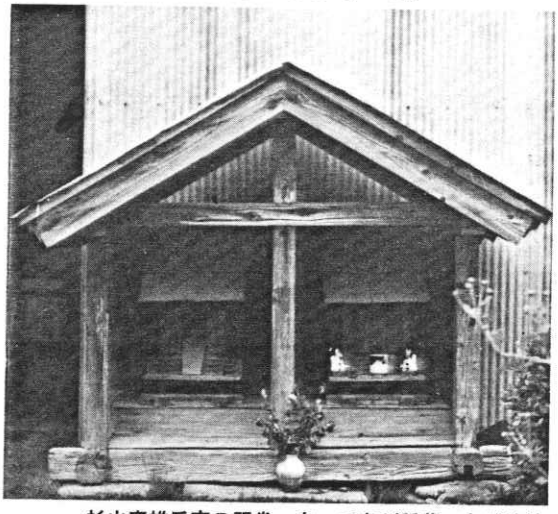
A．三島市多呂280の1番地　新井典衛氏
B．稲荷、馬頭観音、子守様（コマモリサン）
C．祠堂は母屋の裏鬼門の方向に有る。馬頭観音は祠堂前の石塔。
D．2月初午
E．鮮魚、モチ。
F．ここのお宅で特色あるのは子守様である。祀られている木札を見ると、明治12年の2月初午の日に、戸主新井長平が願主となり祀ったものらしい。祭主は神明社祀堂兼権少講義・橘太司馬で、木札の表には奉遷宮子守大神鎮座と書かれている。話者によれば、昔からコマモリサンと呼んで、2月の初午の日にいっしょにお祭してきたけれど、詳しいことは解らないそうである。
G．新井ためさん　明治35年9月4日生

A．三島市多呂285番地　原重夫氏
B．稲荷
C．祀堂は母屋の裏鬼門にあたる方向に有る。
D．2月初午、7月15日神明社の祭、8月14日の三嶋大社の祭
E．モチ、油あげ、鮮魚（2匹）
F．昔は毎月1日・15日に赤いゴハンを供えた。今は近所3軒が正一位稲荷大明神の幟を交換するだけだが、昔はもっと広範囲に行なった。子供が使者として幟を持って来た時には、モチを分けた。（初午）
G　原　しがさん　明治38年7月18日生

A．三島市多呂289番地　新井英宏氏
B．稲荷
C．祀堂は母屋佐背後の小高い所に有る。裏鬼門の方向と言われるが、現在の母屋は建て直した時向きを変えたものと思われる。
D．2月初午、7月14日神明社の祭、8月15日八幡様の祭
E．初午には鮮魚（2匹）、モチ、高盛りにしたゴハン、野菜の煮たもの。他の祭日にはモチ。
F．昔は1日・15日に小豆ゴハンを供えた。稲荷様を尊敬すれば良いことがあると言った。
G．新井三枝さん　明治44年1月18日生

A．三島市多呂243番地　木内平雄氏
B、毘沙門天
C．祀堂は母屋左背後に有る。
D．吉原の毘沙門さんの祭日。
※　この神様は昔おばあさん（故人）が山で拾ったものを、家で祀ったものという伝承があるだけで、今は詳しく解らないそうである。

●以上の外に、新井英宏さんの奥さんの案内で、太原氏宅（現在は無住の屋敷）の稲荷を見せていただいた。祀堂は裏山の中腹に有った。銅葺屋根で、建物は彫刻のある立派なものであったが、住人の無い祀堂はひっそりとしていた。



杉山春雄氏宅の祀堂、向って右が稲荷、左が地神

新井典衛宅の子守様（コマモリサン）の木札

郷土史の散歩道 (2)

館長　長谷川福太郎

この、「道中之日記」の「奥付け」を見ると、

「嘉永六年五年睦月初の七日
　豆陽伊豆佐野村・滝の入・勝俣花岳山人」

と記されている。

勝俣家は、旧伊豆佐野村の名家で、代代名主役を継承していた。「花岳」はもちろん稚号で、本名は「猶右衛門」である。彼が名主役を勤めたことはいうまでもない。

世に、「俳関」や、「連柿堂」で知られた「滝之本連水」は彼の長男で、東海道随一の俳諧人として名を挙げている。

ところで、「花岳」のひととなりについては、残念ながら、何の記録も残されていない。しかしきわめて好学心の強い人であったことは、そのおびただしい蔵書の数や、範囲の広さで容易にわかる。

彼が、繁雑な名主役にありながら、一方文芸に深い関心を寄せていたことは、その収集品の数と内容とがよくそれを物語っている。

要するに、鄙にはまれな文化人であった、ということである。それは、この「道中之日記」にもその一端がうかがえるのである。

しかし、この道中記のほんとうのおもしろさは克明に筆録された、世相の実際にあると思われる。

嘉永6年といえば、ずいぶん遠い昔のように思えるが、実際は今から１２５年前のことでしかない。その１２５年の歳月の持つ歴史の意味に、いまさらの様に驚かされる。それが、この道中記の真価である。

道中之日記

○こたび伊勢路に旅立つ。いかがせんやと、こころすすまずありしに、近き友達のおもいたてに道づれし待らんと進むること、あまたたびなりけるにても、木石にあらざれば、何となく頻りに、参宮のおもいをおこし、頃はむつきはつの七日、せわしくもにわかに、旅の用意し、七日のまだきに起つ。

社中、又は家内のものへも別れをつげ立ち出るとて、

　　旅だつや梅のにおいにさそわれて

正月七日出立。沼津宿　橋本屋にて足揃。同行四拾七人。

○十九日曇天。雪風にて寒し。朝五ッ時新茶屋を駕籠にて出立。二見浦へ参詣。浪風荒くくらみ立ち名残おし。天気ならば絶景ならんに。

二見村門や六郎右衛門にて中食。

七ッ時、御師橋村太夫様へ参着いたす。

○二十日　四ッ半頃駕にて橋村を出、外宮・内宮へ参詣致す。くすべ峠にて休む。浅間へ参詣致す。くすべ村にて夕飯致す。夫より古市かしわやにて、名にしおうおんとを見る。

○三十日天気よし。橋本村・葉田やにて中食。

きい川という川あり。此の川去る子の七月二十四日の大雨に大水出、下田村辺町家流れ、神社仏閣押し流され、村村の男女出て川際の土手を修復し、田畑を開発する有様を見る。実に大そうなる荒なり。

かるかや堂へ参詣致す。鏡石拝見。夫よりかみや村、高野山御用取次所にて休む。案内と連立ち高野山へ登る。不動堂へ参詣。児の滝一見。女人堂へ参詣致す。久根村公文名二ッ谷茶畑沢

田拾弐人は、かんろ院兼帯の防へ入る。麦塚土狩当村七人は高宝院へ入る。御馳走二の膳付きなり。
暮六ッ時着致す。当山坊の数千弐百八拾八坊ありと聞く。谷の数九十九谷あり。

○二月八日曇天。向う風にて舟はかどらず。朝赤穂の湊に着す。退くつの余り舟よりあがり、赤穂を見物致す。塩を取る男女夥し。花兵寺へ参詣致す。
此の寺に四十七人の墓あり。同木像あり。参詣致す。
大野九郎兵衛宅の庭に植たる柳、大石内蔵介宅の庭に植たる桜一見。
赤穂の御城を見物致す。海原へ築出したる御城なり。方方見物致し、又舟に移る。

○十日天気よし。朝舟を出、丸亀小玉や嘉十郎にて朝飯いたし、金比羅山へ九ッ過に参詣致す。
麓内町紅葉や茂八郎にて中食。
夫より善通寺へ参詣致す。七ッ時小玉やに着致す。逆風にて舟出ず。小玉や嘉十郎泊り。

○十一日天気よし。朝六ッ半頃舟に乗り、室津の港へ着致し、町を見物致す。
此の日、舟中発句催等出来る。此の日又又逆風吹出し、広蔵始め舟に酔い、弥兵衛与三郎三人はしかまの港より陸へあがり、京都縫物やにて逢うつもりにて別れる。

○十五日天気よし。朝六ッ時、舟宿門屋にて朝飯を喰い、岩清水八幡宮へ参詣致す。
金の樋長サ拾三間、廻り三尺弐寸弐分。廻廊弐拾四間四面也。
夫よりきづ川の渡しを渡る。此の川去る子の七月二十四日の大水に堤きれ、田畑の荒所多し。堤修復の最中にて、大そうなる普請也。
夫より安田川の渡しを越す。此のあたり大そうなるふけ也。
夫より宇治の手前より、茶畑のある事夥し。宇治の芥所赤天狗にて休む。
夫より平等院へ参詣致す。扇の芝一見。松の枯木横たわり、廻りは石の井垣なり。
宇治菊や市左衛門にて中食。
宇治橋長サ惣間八十四間なり。離宮八幡宮へ参詣致す。其後道を行き興正寺へ参詣す。綺麗なる寺なり。
夫より恵心院へ参詣す。夫より黄檗山万福寺へ参詣す。荷物を寺内へゆるさず。門前なる出茶やへ荷をあずける。
庭に松数本あり。伽藍の大そうなる事筆に尽しがたし。藤の森の社へ参詣。稲荷大明神へ参詣
夫より東福寺へ参詣す。
此の浬槃参りの男女おびただしく、寺内宿内賑やかなる事ども也
三拾三間堂へ参詣致す。古き御堂なり。大仏殿へ参詣致す。御頭斗り出来御建立の最中也。同釣鐘一見致す。
夫より東本願寺へ参詣。間もなく西本願寺へ参詣。両寺雄大なり。西は少し劣りたり。
七ッ半頃、縫物や嘉兵衛宅へ着致す。

以上は、1月7日から、2月25日にわたる49日間の一部である。ずいぶんのんびりした日もあるが`中には、2月15日のように、岩清水八幡宮から、西本願寺まで、現在でも大変と思える強日程もある。
なお、当時の物価や、細かな世相を知るに好都合な、支払帳付けの1部を抜き書きしておく。

1月17日
1.百文　追分、浅竹や五兵衛にて中食
1.弐百文　上野村　門や庄兵衛泊り
1月18日
1.拾弐文　くも津川舟わたし
1.百文　六軒茶や　小津や喜右衛門にて中食
1.拾四文　くしだ川舟ちゃん
1.弐百文　新茶や、秋田や浅右衛門泊り
1月20日
1.弐百参拾弐文　駕やへ祝儀　内弐百文は酒手
1.四百文　是は羽折貸料二日分
1月23日
1.弐百六拾四文　柳ごり代
1.百四拾八文　がっさい袋一ッ

特別展「日本の暦」の報告

去る10月15日から11月30日までの45日間にわたって、郷土館の一階展示室において、特別展「日本の暦」を開催いたしました。丁度この会期中、楽寿園においては恒例の菊花大会が催され、大勢の入園者は十分に三島の秋を堪能されたようでした。

「日本の暦」展は、市指定文化財である三島暦の紹介を中心として、全国の地方暦や旧暦の成立等を知っていただく目的で行なったものです。ここでは、その展示概要と、展示できなかった暦についての説明を付して、報告といたします。

展示概要

1．初期の日本の暦
2．中世からの暦
3．江戸時代の暦
4．特殊な地方暦
5．形態の変った暦
6．七曜暦
7．三島暦
8．大小暦
9．明治の改暦
10．その外（暦法年表、干支、二十四節気）

解説

1．初期の日本の暦

具注暦・応永35年（1428）、仮名暦・応永31年（1424）を展示しました。日本に独自の暦法が無かった時代、中国渡来の暦法を用いて暦が作られました。具注暦は日付や暦注がすべて漢字で細かく書かれていました。これを使用したのは主に貴族階級の人々で、余白に書き込みをしたり、いわば日記のように使っていたようです。この具注暦を解り易く仮名で書いたものが仮名暦です。仮名文字の普及とも関連があり、暦は特定の人々から離れて次第に一般の人々のものとなりつつありました。

2．中世からの暦

中世、中央文化の地方への伝播にともなって、各地に暦師が登場しました。三島暦師はその代表的な存在だったと言えるでしょう。関東には大宮暦、東北には会津暦なども作られ始めました。この頃の暦は、版暦と言って、木版印刷暦でした。暦の需要の増大は木版印刷技術の発達にも深い関連があったわけです。展示では三島暦、会津暦、京暦、南都暦、丹生暦、大阪暦などを出しました。

3．江戸時代の暦

江戸時代に入り、　貞享の改暦があり、日本で初めて和製の暦法が成立しました。以後編暦は幕府天文方の手に移って、各地の暦師は幕府統制の下で頒暦するようになりました。暦が完全に庶民の日常生活の一部になったため、暦師の数も増え、全国を網羅するほどになりました。ここでは伊勢暦、江戸暦、仙台暦、薩摩暦、秋田暦、盛岡暦、弘前暦などを展示しました。

7．三島暦

三島市大宮町の河合家は、三島暦師の後裔に当る家です。当家の伝承によれば、暦師としての起源は貞観年間(859～)であったと言われています。現存最古の三島暦に永享9年（1437）のものがあり、三島暦の歴史の長さを実証しています。三島暦はまた、版暦としても古く、一時代には京暦の版暦までも「三島」という代名詞で呼ばれていたようです。本展示では、河合家からの出品で、三島暦家一千年の歴史を語る古文書、書写暦、版暦、版木、明治の略暦などを展示しました。

8．大小暦

大小暦のコーナーは本展示において大きなスペースを占めたものです。旧暦では年によって大の月（30日）と小の月（29日）の配列が異なっていたため、その年の大小の配列を簡単に覚えるための大小暦が作られました。江戸中期以降の大小暦流行という社会現象も、暦が庶民のものとして定着したということでしょう。ここでは伊勢神宮徴古館所蔵の大小暦を25点展示しました。

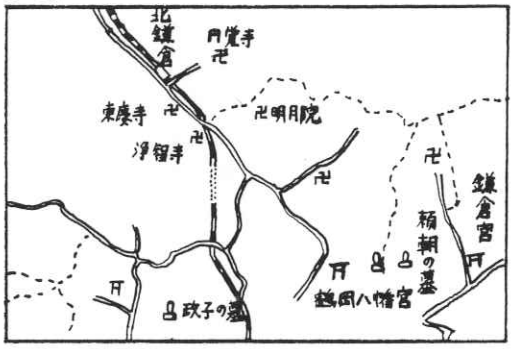
この「日本の暦」展に、貴重な収蔵品を快よく提供してくださった岡田芳朗氏(東京)、勝又幸雄氏(御殿場)、河合真明氏(三島)、神宮徴古館（伊勢)の各氏に感謝の意を表して、報告とします。

天保8年（1837）の酒樽の大小暦、前の樽に大の月(一、三、五、七、八、十、十一)、後が小の月

行事報告

～県外歴史探訪「鎌倉」報告～

現在の歴史ブームは、郷土史への関心も年々高めています。自分の住む郷土をより良く知り愛する為に、他所を見聞して比較しながら勉強する。そんな発想から県外歴史探訪の企画が生まれました。市の広報により、一般市民35人を募集し、9月27日(水)に実施しました。市役所の中型バスで鎌倉へ向い、鎌倉では東慶寺、浄智寺、明月院、円覚寺、鶴岡八幡宮、白旗神社、頼朝の墓、三浦氏一族の墓、鎌倉宮と回り、鎌倉の往時をしのび、鎌倉より歴史の古い、わが町の今はない種々の建造物に思いをはせながら県外歴史探訪の旅を終えました。



松岡山東慶総禅寺（駆込寺由来）

この寺は俗に、駆込寺とか縁切寺と言われている。開基は北条貞時。開山は北条時宗夫人の覚山志道尼といわれる寺であるが、どうしてそのように言われるようになったのであろうか。かつて夫婦の離縁状はふつう三下り半と言った。これは大体において、本文が三行半になっていたから言われたものである。これが夫から妻に渡されれば、それだけで離婚は成立した。（但し、吾妻鏡によれば「不離縁担保の結婚」は鎌倉時代からあり、江戸時代にもこの形式の結婚はさかんであったらしい。）一方封建時代、家族制度のなかで女性の地位が低かったので、妻の側からの離婚の宣告や請求はできなかった。例外として妻の側から離婚したい場合には（夫の承諾がないと）尼寺へ駆けこんで、一定の期間寺で奉公すれば自然に離婚が成立する習慣があった。一般の尼寺に駆けこむのは江戸時代も八代将軍、徳川吉宗の寛保年間（1742年）ごろまでおこなわれていたらしい。この時代「公事方御定書」により、群馬県新田郡の満徳寺と、この北鎌倉の東慶寺以外の寺への駆込は認められなくなったのである。　（稲　木）

県外歴史探訪「鎌倉」に参加して

北田町２～27
水谷孝太郎

鎌倉の歴史めぐりを三島広報を見まして、早速電話にて申込みましたら、沢山の希望の方の中から行かして下さいまして有難う御座居ました。

先ずバスが出発すると同時に館長様から郷土三島の色々の昔の話を聞きまして、私し三島で生れて今まで知らなかった三島の貴重な歴史の古いのには、びっくり致しました。特に今はなくなりました五重の塔など勿体ない事でした。その点今度行きました鎌倉は、実に良く史跡が保存して有るにはびっくり致しました。私しは鎌倉は小学六年の時に行きまして今回行き、昔しのまま開発もされてなく偉いと思いました。今回は墓地を特に廻りまして感じたことは、今まで知らなかった墓の種類の名前は良い勉強になりました。又、谷中と云うそうですが昔の人は良くも造ったと感じました。とても為になりまして、厚く御礼申します。

芙蓉台３～19～27
輿石　節子

昨年も友人と鎌倉に参りました。同じ場所を同じ時間をかけて廻り、その中味の違いに驚いています。私は三島っ子です。しかし先日、先生から御説明のあった素晴しい建造物や、鎌倉時代の三島について、他の誰れからも教えられた記憶がありません。何年か前、新聞紙上で国分尼寺等についての記事に、少しお目にかかった程度でした。もっとも、自分の不勉強で三島について知ろうともしなかったのは事実ですが……。

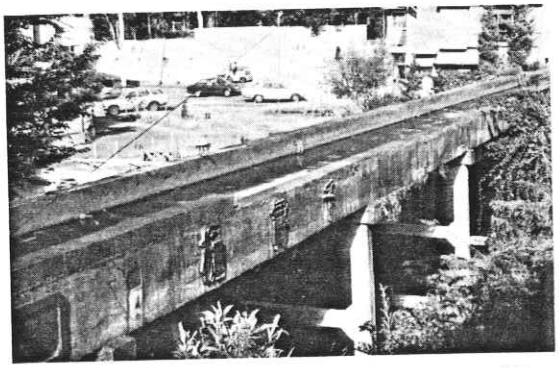
これを機会に雲助文化、女郎文化以前の三島をもっと知りたいと思っています。また、現在小学生の社会科の副読本となっている「みしま」の内容にも織り込めたら、もっと自分たちの郷土に愛着と感動を覚えるのではないかとも思い　す。

次の機会を楽しみにしております。ありがとうございました。

ふるさとのしおり　　みしま

①千貫樋

三島の西端は伊豆国と駿河国の国境であった。ここには境川が流れている。千貫樋は三島の小浜池（現在の楽寿園内）の水を境川の上に樋を渡し駿河国の玉川、伏見、八幡、長沢、柿田の五ヶ村に引いたものである。葛飾北斉の「東海道」文化版には木材で作られた「千貫樋」の全景が画かれているが、大正12年の地震で破壊したので、鉄筋コンクリートに作り直され今日に至っている。駅用掌記に「長さ25間、幅1尺、深さ1寸5分、高さ1丈5尺」と書かれており、樋の当初の修造の様子が伺える。樋の「千貫」の名称の由来はまちまちで、架設が巧なため銭千貫に価するとか、またこの用水で高千貫の田池を潤すためとも、その建設費が銭千貫を費したともいわれるが、いずれがよいか詳かでない。清水町の中村利夫氏は土地の古老の話しとして「樋が千貫あるように重かった。」と話しており、いずれも確証はない。この樋の架設年代等については「駿河国新風土記」の贄川他石は三説をあげているが、ここでは通説に従って記述しておく。応仁3年（1469）はじめて作られたがその後腐巧し破壊した。しかし戦乱の時代で復旧の方法がなかった。天文23年（1554）3月になって、雪斉和尚の斡旋により武田・今川・北条三家和親し、小康を復たので今川家から北条家に協議して掛樋の復旧をしたといわれる。そして駿河、今川領の石高千百余石の田地灌漑を完うしたものと解されている。　（稲　木）



（千　貫　樋）

★★★★　おしらせ　★★★★

●郷土館の行事予定

12月10日（日）　体験講座〈おかざり作り〉
　講師　芹沢貫一氏　対象　一般市民
　―正月の飾りを、自らの手で作る―
1月28日（日）　体験講座〈初午幟作り〉
　対象　市内小学5・6年生
　―初午に飾る幟を作り、年中行事を聞く―
1月～3月　「収蔵品展」
　―未公開の収蔵品と、新収集品の展示―
※申込、問合わせは郷土館まで

●入館者教

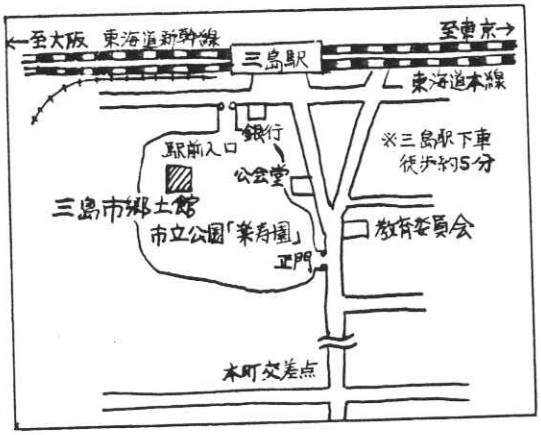
	学生	一般(個人)	一般(団体)	合計
8月	5,436	5,195	(3)1 3 3	10,764
9月	1,593	2,486	(2)1 1 3	4,192
10月	1,632	3,027	(3)2 1 3	4,872

■あとがき■

〝暦展〟もぶじに終了し、〝オツカレサマ！〟と一息。もつかの間、有終の美を飾るに相応しい〝おかざり作り〟講習の準備にと……じっとしている暇もないほどである。　小杉

利用案内

休館日　毎月第1月曜・12月27日～1月2日
開館時間　午前9時～午後4時30分
入場無料　（但し、楽寿園入園の際、有料）



郷土館だより　No.2
昭和53年12月1日発行
（年3回発行）

編集・発行　三島市　郷　土　館
住所　〒411　三島市一番町19―3
TEL　0559―71―8228